

みんなにとっての流域治水

青森県における推進に向けて

◆語り手

瀧 健太郎

たき けんたろう

滋賀県立大学環境科学部 准教授

博士(工学)・技術士(建設部門)

略歴

1998年3月 京都大学大学院工学研究科修了
 1998年4月 (株)建設技術研究所入社
 1999年4月 滋賀県庁入庁
 2005年4月 (財)リバーフロント整備推進センター出向
 2007年4月 滋賀県流域政策局流域政策室
 2012年4月 滋賀県観光交流局(ミシガン州派遣)
 2014年6月 関西広域連合本部事務局
 2017年4月 滋賀県立大学環境科学部 准教授



◆聞き手

金 俊之 こん としゆき

青森県河川砂防課企画・防災グループ主査

野呂 海幸 のろ みゆき

青森県河川砂防課企画・防災グループ技師

1. 河川への想い

金◆今日は宜しくお願いします。

瀧◆お願いします。

金◆瀧先生はこれまで河川工学・土木工学に携わってこられていますが、いまにいたるまで一貫して考えてきたことがあれば教えてください。

瀧◆川に関わる人は本当に良い人が多い。川はすごく素敵。みんなの安全を守る、みんなの豊かさを供給する、水をみんなに配る。川そのものが恵みだったり、魚だったり。みんなが川を中心に“まち”をつくって、豊かさを得るためにまちづくりがされてきた。この川を守っていききたい。みんなに愛される状態に川をしておくことに貢献していきたい(図1)。



図1 河川への想いを熱く語る瀧先生

2. 流域治水へのシフト

金◆その「川」ですが、最近毎年のように豪雨によって災害が発生しています。こういう状況の中で令和3年11月に流域治水関連法が全面施行されました。河川管理者だけでなく、流域全体で対応していくという流域治水へのシフトが全国的に明確化されましたが、最近の洪水への印象、流域治水へシフトする流れについてはどのように感じていらっしゃいますか。

瀧◆気候変動の影響で大水害が毎年起きている。気候変動がきっかけで「今までの治水のやり方で良いのか」というのが問い直されているように思う。

河川整備を頑張ってきて、治水安全度が上がってきたので洪水が河川を超えるようなことが、もしかしてもうないのではないかと、思うようになってきた。ただ、気候変動の影響で超えるということが当たり前になってきて、あらためて超えることがあるかもしれない、と思い出すこともでてきたと感じる。

川の堤防はみんなを平等にある一定のレベルまで守ることはできるけれども、水害があってリスクがあるとすれば、みんなに平等にリスクがあるわけではない。リスクに応じた暮らし方、まちづくり、避難の仕方があるのにそれができていない。それができていなかったから、何かがあった時に被害がより大きくなってきた。最近の水害の状況で見えてきた。

僕たちが忘れてしまった“もの”、昔はできていたのに忘れてしまった“こと”を思い出させるために仕組みとしてできたものが「流域治水」関連法なのではないか。

一定の河川整備が進んできた。それを超えるような災害があると僕たちが住んでいるまちはすごく脆弱。もう一回見つめ直して治水の体系全体を考え直しましょうという考えで今のこの流域治水の流れ、つまり適切な流れにならざるをえなかった。

3. 滋賀県での流域治水

金◆流域治水について、瀧先生は滋賀県職員から今にいたるまで専門的に携わっています。滋賀県の取り組みは全国的にクローズアップされています。先進的に取り組まれている滋賀県の流域治水について、概要を教えてください。

瀧◆滋賀県は川の中での整備はしっかりやっていく。それでも対応できないことがある。ここをみなさんと一緒に進めていく。どんな洪水があっても命が失われることは最低限なくしましょうということを目標にみんなで治水を考えようと言いだめた。

大事なのは水害リスクをみなさんと共有すること。滋賀県の流域治水の特徴は、水害リスクについて非常に詳しく示すような基礎情報を作ったところが大きい。たとえば10年に1回の洪水、30年、50年、100年、200年、1000年に1回…。それぞれどういう状況になるのか、それに合わせて避難はどうしたらよいか、まちづくりはどうしたらよいか、リスク情報をみんなと共有してなければ、対策を考える議論にもならない。

そうならないようにダムと堤防で抑えようという発想にしかない。限界を踏まえ、状況がわかると議論ができる。滋賀県での流域治水の特徴は、基礎情報をしっかり整備した上でみんなで考えよう。まずは避難から考える、避難で対応できないので土地利用を考える、リスクベースで議論を展開していくことが特徴。



図2 瀧先生との対話に耳を傾ける研究室の学生

4. 青森県流域治水の深化に向け

金◆滋賀県では約20年前から流域治水に取り組み、条例ができたのが10年くらい前です。

青森県では一昨年・昨年、各市町村の流域治水プロジェクトを作り、これから具体的に動いていくというのが実状です。大きく分けて河川管理者とあらゆる関係者(市町村)がいますが、河川管理者は着実に河川整備を進めていきます。一方、市町村からすると、流域治水という大きなビジョンの中で具体的に何をすればよいか、どのようなものが治水に寄与するのかな、わからないという声を聞きます。

取組を進めていく中でこういう着目点に留意しながら進めていけばよいという点があればサジェスション(示唆)をお願いします。

瀧◆ぜひ身近な問題を解決するために流域治水をつかってもらいたいです。流域治水に協力しようという中で川に負担をかけない提案や意見があるけれども、もっと自分勝手になっても良いと思う。水害からみんなの命を守る、足元からできることをする。

流域治水の中では「集水域、川の中、氾濫域」での対策が出てくる。あふれた後、命を守るためにどういう避難があるのか、土地利用があるのか、どういう家の建て方があるのか、ということだと皆さんは本当に考えやすいと思う。その対策をする際、どういう制約があるのか、リスクに対応しなければならないのか、ということは河川管理者が情報を一生懸命出そうとしている。河川管理者に相談しながら自分たちの財産、生命を守ることが一生懸命やることが流域治水で一番大事なことです。

5. 関係者と未来に向けた対話

金◆最後ですが、対策をしようとした時にステークホルダーとやりとりができてきます。このような際、関係する住民などから理解を得るポイントは何でしょうか。

瀧◆本当に地域にプラスになるのであれば、色々な議論を通じてみんなですりあわせることができる。無理なこと、理にかなわないことを言うのではなく、流域治水が地域のためになるし、地域の災害を最小化しながら、地域資源を生かして繁栄していくというところに近づいていく。ここの納得が得られるかどうか。昔の地域ではできていたことをもう一回しっかり話し合っ、解決策を導いていくという姿勢があれば、ステークホルダー間の議論は建設的になる。

合意ができる必要はなく、どういう落としどころが地域にプラスになって地域と向き合い、みんなでしゃべること自体が一番大事なことです。

ただ落としどころを作ることだけじゃなく、みんなで腹を割ってみんなで未来を考える姿勢で臨んでいくことが良いと思う。

金◆今日は河川に対する熱い想いを瀧先生からお聞きしました(図3)。どうもありがとうございました。

瀧◆ありがとうございました。



図3 瀧先生の研究室前には数多くの流域政策にかかわるポスターが掲示